

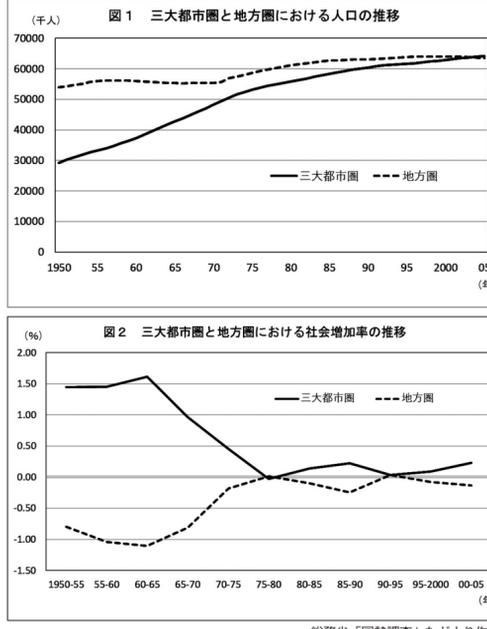
現代社会と宗教

コミュニティの役割と変化

前回(1124号、3月27日付)は、戦後の日本家族の変容を整理し、新宗教の課題を指摘した。今回は日本社会におけるコミュニティの変化と、その側面からみた新宗教発展の意義、そして今後の見通しを考察する。

「サードブレイス」コミュニティの核となる「地域密着」「居場所」「顔なじみ」「気遣い」「多様な人々と目的」「対等」「自発性」などの特長がある。著者はアメリカの社会学者R・オルデンバーグが「サードブレイス」(第3の場所)とはカフェ、本屋、バー、美容室などの「たまり場」のこと。ファーストブレイス(家庭)、セカンドブレイス(職場・学校)の窮屈さ、利害関係から解放され、仲間とくつろげる場(コミュニティ)である。新宗教における教会、支部などもサードブレイスと見られるかどうかが重要である。

「サードブレイス」コミュニティの核となる「地域密着」「居場所」「顔なじみ」「気遣い」「多様な人々と目的」「対等」「自発性」などの特長がある。著者はアメリカの社会学者R・オルデンバーグが「サードブレイス」(第3の場所)とはカフェ、本屋、バー、美容室などの「たまり場」のこと。ファーストブレイス(家庭)、セカンドブレイス(職場・学校)の窮屈さ、利害関係から解放され、仲間とくつろげる場(コミュニティ)である。新宗教における教会、支部などもサードブレイスと見られるかどうかが重要である。



戦前・戦後の日本仏教とアジア日本人僧侶の足跡と変遷を探る

日本宗教学会 第79回学術大会公開シンポジウム

日本宗教学会は9月18日から20日まで、第79回学術大会を初のオンラインで開催した。公開シンポジウム「近代日本の仏教―戦前・戦後のアジアにおける連続性と断絶―」は16日から20日まで5日間配信した。

シンポジウムは、近現代のアジアの中で、日本仏教が戦前と戦後にどのような断絶が、また現在にいたるまでどのような連続性があるかを学際的な視点から問うもの。3氏が講演し、愛知大学国際問題研究所客員研究員の坂井田多起子氏は「戦後日本と東アジア仏教世界の交流―第2回世界仏教徒会

新宗教において、セカンドブレイスをもたない専門職(現代日本では共働き)の方が多く少数派。前回の連載(現代日本)が依然と中心的で、代々の信仰継承家庭が多くなり、ファーストブレイスやセカンドブレイスとの境目が曖昧になっているからこそ、サードブレイスの特長をいかに活かせるかが、教会や教団の活性化のヒントになるかもしれない。

「コミュニティの変化と新宗教発展の意義」

終戦から高度成長期にかけて(1970年代前半)は、最も新宗教が発展した時代である。日本の戦後復興は、朝鮮戦争(1950年〜53年休戦)による特需をアゴとして、急速な工業化と都市化を招き、都市の工場やサービス業では慢性的な人手不足が生じた。地方農村では、アジア太平洋の戦地、旧満州、朝鮮半島、台湾など旧地からの引揚者、そして戦後直後のベビーブーム世代であり、人々が職を求めて都市へ移った。図1のように、三大都市圏(東京、名古屋、大阪)への人口集中化は明らかで、図2に示す「社会参加率(移動による人口の増加率)」移動による人口の増加率は、70年代前半まで、地方から三大都市圏へ大規模な人口移動が続いたことがわかる(出生・死亡による変化率=自然増加率は周囲でそれほど変わらな

連続性と断絶 学際的に問う

日蓮の「西天経」を志し、満州を経た日蓮(西天)へ渡り、戦中、藤井と弟らは従軍僧侶として宣撫工作に携わり、戦後は非暴力・平和運動に邁進するようになるが、ムコパティヤヤ氏、敗戦後の「ガンジー」の交流が、敗戦後の藤井と日本山妙法寺に思想的、実践的展開を果した。義・平和主義を標榜するトランスナショナルな仏教団体が展開していったと分析した。

講演の後、駒澤大学教授の石井公成氏がコメントし、あらためて大乗仏教と上座部仏教の教義や戒律、戦争に対する考えの相違、また現在も継続する日中間の敷用工の遺留返還の問題などを解説した。

シンポジウムは、戦後という歴史の大きな節目を生き抜いた3人の日本人僧侶の足跡と思想の変遷などを詳細に辿る内容で、異国の宗教者との交流には、両国の歴史や宗教・思想との相違をいかに理解し、自らがどう受け止め対応していくかが、いかに重要であるかを再確認するものとなった。

オンライン学術大会には477人が参加登録、シンポジウムの視聴回数は250回以上にのぼった。

主に農家の次男三男であった彼らが都市で新たに「つ」た家族(核家族)が、新宗教の初代信者(世帯)の典型だった。農村の地域コミュニティと家(二世帯同居の直系家族)から離れた(鬼神、檀那寺とも疎遠)共同体という新たなコミュニティに包み込まれたのが新宗教だった(社会学者・鈴木広らの研究を参照)。

さらに言えば、都市での新たなコミュニティは新宗教だけの動労青年のサークルがつけられ、一定規模以上の会社には労働組合がある他、会社が従業員(場合によってはその家族まで含む)の社会的つながりをつくる仕組みがあった(社員寮・社宅、社内運動会、社員旅行など)。地縁・血縁から社縁(会社縁)への変化と言える。

「コミュニティ離れと新たなつながり方」

人々は、こういったつながりによって、情報を得たり、困った時に支え合ったり、ただでなく、感情的にも満たされた。医療、福祉、経済支援などの社会保障制度が整っていない時代、このようなコミュニティの存在は

新刊紹介

宗教に明日はあるか?

中央学術研究所 編

本書は中央学術研究所が主催し、2014(平成26)年から17(同29)年にかけて計8回にわたって行ってきた「宗教を専門とする研究者による講義と座談会の記録」を出版した。同研究所創立50周年記念として出版された。

講義と座談会に参加した研究者は安藤谷正彦(神道)、坂本晃(キリスト教カトリック)、眞田芳憲(イスラーム)、竹村牧男(大乗仏教)、ホランマリア(キリスト教カトリック)、森章司(釈迦仏教)の6氏。

「日本主義」とは、明治中頃から戦時下にかけて使われた言葉で、「国粹」「日本精神」「国体」などの表現と同様に、日本の過去の「伝統」の価値を特別に重視する立場。「日本主義」の代表的論者には、宗教を否定する者もいるが、書名通り、近代の仏教思想と深く関わっている。

本書は、仏教系大学や宗派の研究所に所属し、僧侶でもある30〜40代の若手・中堅の研究者を中心とした執筆陣による共著である。編者らによれば、戦時下の仏教の大勢は戦争協力や国家権力の神聖化に奔走し、戦争やそれを推し進めた当時の国家に「従属し

戦後75年 秋季慰霊祭 慰霊の灯を次世代へ

千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会

各界来賓献花の中で、新宗連の岡田理事長が献花

千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会(墓苑奉仕会、津島雄二会長)は10月19日午後1時から、東京・九段の国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑で戦後75年の「秋季慰霊祭」を執り行った。

新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、墓苑への参拝者が激減し、戦没者慰霊の灯をともし続けることに危機感を抱きながらも、幸い関係団体ではこれまで通り慰霊行事や参拝を執り行っていた。この中で、新宗連の岡田理事長は「秋の辞」(代表)の後、秋篠宮同妃両殿下の拝礼に合わせ、参列者一同が拝礼し、黙祷を捧げた。

この後、陸・海・空自衛隊部隊が拝礼し、遺族会、戦友会、各界来賓の献花が行われた。この中で、新宗連の岡田理事長も献花した。最後に一般参列者による献花が行われ、閉式した。

ひとりで悩まず電話して!

ホントにつらい時って誰にもいえない…よね。

- 必要に応じて面接をしています。
- 手紙でのご相談にも応じています。
- 秘密は守られます。
- 相談は無料です(通話料はかかります)。
- 金銭的な援助はできません。
- 医療・法律・教育関係の助言や指導は、専門家をお願いします。
- 特定の思想・宗教・政党などとは一切関係ありません。

NPO法人 国際ヒフランダース

東京自殺防止センター

03-5286-9090

年中無休・深夜2時30分まで
月曜は夜10時30分から深夜2時30分まで
火曜は夕方5時から深夜2時30分まで

〒169-0072 東京都新宿区大久保3-10-1 日本基督教団シロム教会内
事務局電話番号 03-3207-5040 (FAX 03-3207-5098)

●全国にある他の自殺防止センター
 国際ヒフランダース 大阪自殺防止センター
 03-6260-4349 毎週金曜、午後1時から10時まで
 国際ヒフランダース 宮崎自殺防止センター
 0985-77-9090 毎週日曜・月曜・水曜・金曜、午後8時から11時まで
 国際ヒフランダース 岩手自殺防止センター
 019-621-8298 毎週土曜、午後8時から午前0時まで
 国際ヒフランダース あいち自殺防止センター
 052-370-9090 毎週金曜、午後8時から11時まで